HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	受身から見た大墩保安語の主題化
Author(s)	アルラ
Citation	北方言語研究, 15, 53-69
Issue Date	2025-03-20
DOI	https://doi.org/10.14943/112971
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94615
Type	departmental bulletin paper
File Information	04_Arula.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北方言語研究 15: 53-69（日本北方言語学会 2025）

受身から見た大墩保安語の主題化

アルラ
（東京外国語大学大学院）

キーワード：保安語（モンゴル諸語）、記述言語学、受身、主題化

1. 問題の所在

本稿では、中国甘粛省で話されるモンゴル諸語の一つである保安語大墩方言(以下、大墩保安語と呼ぶ)における、語順による目的語主題化文と中国語借用要素 ʂi(是)による目的語主題化文の特徴を、受身文の統語的・機能的観点から比較対照する。

先行研究(後述参照)によれば、保安語には受身を表す専用の要素が存在しない。

① 現代モンゴル語(-gd)、東部裕固語(-gd)などのモンゴル諸語は受身を表す形態素を有するが、大墩保安語にはこれらのモンゴル諸語と異なって受身を表す形態素が存在しない。

② 大墩保安語は使役接尾辞(-gə)を有する。現代モンゴル語(-uul)、土族語(-lɢa)(照那斯图 1981:34)では使役構文が受身の意味を表すのに対し、大墩保安語にはそのような使い方がない。

③ 大墩保安語において受身がどのように表されるのかを検討するために、中国語において典型的に受身を表す「被」構文の文が、大墩保安語においてどのように表されるかを調査した。その結果、語順による目的語主題化文[1]が規則的に現れることが確認された。

このことは、大墩保安語において受身と主題化が何らかの点で関連していることを示唆していると考えられる。しかし、ここで問題となるのは、大墩保安語におけるもう一つの主題化構文である ʂi による目的語主題化文[2]が③において現れなかったという点である。

④ 大墩保安語の ʂi による目的語主題化文は、中国語の主語が動作対象である「是…(的)」構文に対応して用いられている。

著者の調査において、語順による目的語主題化文は統語的特徴が Shibatani (1985)の典型的な受身文と異なるにもかかわらず、「被」構文に対応して用いられている。一方、統語面で Shibatani (1985)の典型的な受身文に共通する ʂi による目的語主題化文は、「被」構文に対応して用いられているわけではない。このとき、「被」構文に対応する形式がどのように選択されているのか説明する必要がある、という問題が生じる。

そこで本稿では、「被」構文に対応する形式が語用論的機能によって選択されているという仮説を立て、中国語の「被」およびそれに関係する「给・让・叫」構文と、大墩保安語の語順による目的語主題化文、ʂi による目的語主題化文を、受身の語用論的機能の観点から比較対照し、結論として中国語の「被」構文と大墩保安語の語順による目的語主題化文は共通して、Shibatani (1985)が主張する動作主の脱焦点化という語用論的機能をもっており、その

[1/2] 大墩保安語の無標の語順は SOV である。アルラ (2023)は、大墩保安語の目的語を文頭に移動する語順の変化による有標の語順において、文頭に置かれる要素は主題であり、大墩保安語の中国語借用要素 ʂi の前の要素は主題である、と述べている。

ために、大墩保安語では中国語の「被」構文に対応して語順による目的語主題化文が現れる、ということを主張する。

以上が、本稿において扱う問題点である。2 節では、先行研究で述べられているモンゴル諸語の受身について概観する。3 節では、Shibatani (1985)が提案する典型的な受身文の特徴について述べる。4 節では、大墩保安語の語順による目的語主題化文と中国語の「被・给・让・叫」構文を、Shibatani (1985)が提案する典型的な受身文の統語的特徴と機能的特徴から考察する。5 節では、大墩保安語の ʂi による目的語主題化文と、主語が動作対象である中国語の「是…(的)」構文を、Shibatani (1985)が提案する典型的な受身文の統語的特徴と機能的特徴から考察する。6 節では、受身と主題化、そして大墩保安語における中国語借用要素 ʂi の機能について議論する。7 節では、結論として考察のまとめと今後の課題について述べる。

本稿の大墩保安語の言語資料は、著者が中国・甘粛省積石山県大河家鎮で行った言語調査により採録したデータを用いる。著者の調査に協力してくださったコンサルタントは、1949 年生まれ、大墩村出身の馬瑞氏である。馬瑞氏は、保安語に加え、現地の中国語の臨夏方言[3]、中国語普通話を話す。馬瑞氏は保安族の言語や民話等に関する豊富な知識を持っており、非物質文化伝承人という称号を得ている。馬瑞氏は大墩村出身であり、定年退職まで大墩村の小学校で教職に就いていたことから、氏が話す保安語は大墩方言と推定される。

本稿の例文のうち、出典の表示のないものは著者の調査によるものである。

2. モンゴル諸語の受身

2.1 現代モンゴル語

Kullmann and D. Tserenpil (1996:124)は、モンゴル語は動詞に接尾辞-gd を付加することによって受身を表し、さらに口語では使役接尾辞-uul の使役の意味が失われ、受身の意味を表す場合がある、と述べている。

(1) ənə mədə-n baiʃiŋ 1935 ɔn-d bari-**gd**-san.[4] (Kullmann and D. Tserenpil 1996:124)
この 木-EP 家 1935 年-DAT 立てる-PASS-PCTP.PST
「この家は 1935 年に建てられた。」

(2) nəg bʊga tʃɔnɔn-d id-**uul**-dʒee.[5] (Kullmann and D. Tserenpil 1996:124)
一つ 鹿 狼-DAT 食べる-CAUS-PST
「鹿は狼に食べられた。」

2.2 河湟語

中国の甘粛省・青海省で話される、保安語及び周辺の東郷語、東部裕固語、土族語、康家語は総称して河湟語と呼ばれる。

Kurebito (2017:8)は、東部裕固語は接尾辞-gde/-gte によって受身を表し、使役接尾辞-uul は受身の意味を表すことができる、と述べている。

---

[3] 臨夏方言とは、大墩保安語の話者が居住する中国・甘粛省臨夏回族自治区の地域で話される中国語の西北方言の一つである。

[4/5] キリル文字の翻字である。

(3) bu htaa-də hta-**gda**-βa. (Kurebito 1996:124)
1SG 煙-DAT 噎せる-PASS-PST
「私は煙で噎せた。」

(4) bu ter xün-eer argal-**uul**-βa. (Kurebito 1996:124)
1SG あの 人-INS 騙す-CAUS-PST
「私はあの人に騙された。」

Kurebito (2017:9)は、土族語、保安語、東郷語には固有の使役を表す形態があるが、受身を表す形態はなく、東郷語では中国語借用語 naiji(中国語「挨」より)で不如意の受身を表す、と述べている。

(5) bi tərə-ni sukeni **naiji**-wo. (Kurebito 2017:9)
1SG 3SG-ACC 騙す PASS-PST
「私は彼に騙された。」

照那斯图 (1981:34)は、土族語は使役接尾辞-lɑa によって受身の意味を表す場合がある、と述べている。

(6) deɛə-nə noxuai-də de-**lɑa**-va. (照那斯图 1981:34)
食べ物-ACC 犬-DAT 食べる-CAUS-PST
「食べ物は犬に食べられた。」

2.3 まとめ

モンゴル諸語の受身形態と使役形態は次の表にまとめられる。括弧内の形態は使役接尾辞が受身を表すことを示す。

表 1：モンゴル諸語の受身形態と使役形態

	受身形態	使役形態
現代モンゴル語	-gd (,-uul)	-uul
東部裕固語	-gde/-gte (,-uul)	-uul
東郷語	naiji	-ʁa
土族語	(-lɑa)	-lɑa
大墩保安語	×	-ɢə

表 1 が示すように、現代モンゴル語、東部裕固語と東郷語は受身を表す形態を有する。土族語には受身を表す形態が存在しないが、使役構文が受身を表す場合がある。ただし、大墩保安語には受身を表す形態が存在しない上に、使役構文で受身を表す形式も存在しない。このことを踏まえ、大墩保安語において受身がどのように表されているのかを検討する。

3. 受身文の統語的・機能的特徴：Shibatani (1985)

Shibatani (1985)は、典型的な受身文を以下の表のように定義している。典型的な受身文を形態論、統語論、意味論と語用論の四つの面から特徴づけており、典型的な受身文の主要な

機能は動作主の脱焦点化(agent defocusing)である(Shibatani1985:830)、と述べている。

表 2：Shibatani (1985:837)による典型的な受身文の特徴

典型的な受身文の特徴	
形態論的特徴	動詞＋接辞
統語論的特徴	動作対象→主語
意味論的特徴	主語が影響される
語用論的機能	動作主の脱焦点化

本稿では、Shibatani (1985)の典型的な受身文の特徴を基に、大墩保安語の語順による目的語主題化文、şi による目的語主題化文及び中国語の受身において、動作対象が主語になるという統語的特徴と、動作主が脱焦点化されるという機能的特徴を中心に考察する。

4. 大墩保安語の語順による目的語主題化文と中国語の「被・给・让・叫」

中国語の受身は先行研究で幅広く検討されてきた。本稿では中国語の受身表現から二種類[6]を扱う。

Hashimoto (1988:329)は、中国語の受身文において受身マーカーは「被」であり、「被」は受身文の動作主を明示的に示す。「被」は比較的文語的な表現であり、口語での対応語として「给・让・叫」がある、と述べている。

本節では、中国語の「被・给・让・叫」構文とそれに対応する大墩保安語の語順による目的語主題化文を扱う。そして、Shibatani (1985)の典型的な受身文の統語的特徴と機能的特徴を中心に、中国語の「被・给・让・叫」構文とそれに対応する大墩保安語の目的語主題化文を考察する。中国語の「被・给・让・叫」構文は、Shibatani (1985)が主張する典型的な受身文の特徴と統語的にも機能的に共通している。大墩保安語の語順による目的語主題化文は、Shibatani (1985)が主張する典型的な受身文の特徴と機能的には共通している。

4.1 大墩保安語の語順による目的語主題化文

本節では、先行研究で述べられている保安語の受身を Shibatani (1985)のいう典型的な受身文の統語的特徴と機能的特徴の観点から概観する。

4.1.1 形態・統語的特徴

Todaeva (1964:74)によると、保安語の大河家方言には動作対象が他者の影響を受けることを示す受身文がないという。

陳乃雄 (1986)は、保安語の同仁方言には受身を表す固有の接尾辞がなく(陳乃雄 1986:235)、モンゴル語と同様に、保安語の同仁方言の使役接尾辞(-gɑ)は受身の機能を兼ねている(陳乃雄 1986:238)と述べ、以下の例を挙げている。Wu Hugjiltu (2003:343)も同様に、保安語で、目

[6] 4 節では中国語の「被・给・让・叫」構文、5 節では主語が動作対象である中国語の「是…(的)」構文をそれぞれ扱う。

的語が文頭に置かれ、述語に使役接尾辞が付く場合は受身を表す、と述べている。

(7) ɕɑ ɕualɑ-nə wɑr-**ɕɑ**-rtɕ. (陳乃雄 1986:238)
狐 二つ-ACC 捕まえる-CAUS-PST
「二匹の狐が捕まえられた。」

更に、保安語の同仁方言においては、目的語を前置することによって受身を表すことができる(陳乃雄 1986:237)。

(8) nəɕəi-nə tɕinɑ dʑuː-rtɕ. (陳乃雄 1986:238)
犬-ACC 狼 咬む-PST
「犬は狼に咬まれた。」

(7)は使役接尾辞が付いているが、動作対象が対格のままである、という点で統語的にShibatani (1985)の典型的な受身文に合わない。(8)は動詞に接尾辞が付いていない上に、動作対象が主語とならないという形態・統語両方の観点で Shibatani (1985)の典型的な受身文に合わない。

著者の大墩保安語における調査データでは、中国語の「被」構文に対応して(9b)のように目的語を前置するパターンがみられる。

(9) a. 羊 **被** 狼 抓 了。
羊 被 狼 捕まえる PRF
b. **ɕunə-nə** tɕina var-tɕ.
羊-ACC 狼 捕まえる-PST
「羊は狼に捕まえられた。」

4.1.2 機能的特徴

(9b)はアルラ (2023)が指摘する語順による目的語主題化文に相当する。大墩保安語の語順による目的語主題化文は、上の(9b)のように動作対象の後に動作主が現れる場合に加え、(10)のように動作主が省略される場合もある。大墩保安語の語順による目的語主題化文では動作主が省略可能であることから、Shibatani (1985)の典型的な受身文と機能的特徴が共通している。

(10) ɕunə-nə var-tɕ.
羊-ACC 捕まえる-PST
「羊は捕まえられた。」

4.2 中国語の「被・给・让・叫」構文

本節では、中国語の「被・给・让・叫」構文を Shibatani (1985)の典型的な受身文の統語的特徴と機能的特徴の観点から考察する。

4.2.1 統語的特徴

劉月華・他 (2019:748)は、中国語の「被」構文には「被」の後に目的語がある型と「被」の後に目的語がない型があり、さらに口語で受身の意味を表す場合は「给・让・叫」が常に使われる(劉月華・他 2019:753)、と述べている。

朱徳熙 (1982:178)は、「被」は動作主を目的語として引き出すものとして機能しており、動作主が不明か必要ない場合、「被」の後に目的語が現れないこともあり、さらに、「被」以外に、「给・让・叫」も同様の機能を持っている、と述べている。

(11) 小宝　**被**　坏人　打　了　一　顿。(劉月華・他 2019:746)
　　人名　被　悪者　殴る　PRF　一　回
　「小宝が悪者に殴られた。」

(12) 我　的　车　**叫**　小李　开　走　了。(劉月華・他 2019:746)
　　1SG　の　車　叫　人名　運転する　行く　PRF
　「私の車は小李が運転して行った。」

(11)(12)が示すように、中国語の「被・给・让・叫」構文は、動作対象が文頭に置かれ主語に交替し、「被・给・让・叫」の後に動作主が来る、という点で統語的に Shibatani (1985)の典型的な受身文と共通する。

4.2.2 機能的特徴

Hashimoto (1988:334)は、中国語では前置詞「被」によって受身を表す、と述べている。また、「被」構文において目的語が現れない場合が多くあるが、中国語では目的語のない前置詞は論理的に矛盾しており、このような前置詞はほかに見られない、と述べている。Shibatani (1990:328)は、中国語の受身文においては動作主がエンコードされる必要がない、と述べている。

三宅 (2009:55)は、中国語の「被」構文について、「動作主が何をしたか」ではなく、「動作対象がどうなったか」という視点からの表現であり、動作主が背景化されている、と説明する。そして、「被」構文の目的語の位置に立つ動作主は統語構造上に表出されないこともある、と述べている。三宅 (2009)に従えば、中国語の「被」構文は Shibatani (1985)の典型的な受身文の機能的特徴に適合することになる。

劉月華・他 (2019:753)は、中国語の受身を表す「被・给」構文は目的語の位置に立つ動作主の省略が可能であるが、「让・叫」構文は動作主の省略が不可能である、と述べている。つまり劉月華・他 (2019)に従えば、「被・给」構文のみ Shibatani (1985)の典型的な受身文の機能的特徴に共通しており、動作主が脱焦点化されているとみることができる。動作主の脱焦点化の特徴から考えると、中国語の「被・给」構文は、Shibatani (1985)が主張する典型的な受身文であるが、「让・叫」構文は典型的な受身文ではない。

4.3 大墩保安語の語順による目的語主題化文と中国語の「被・给・让・叫」構文の比較

本節では、中国語の「被・给・让・叫」構文とそれに対応して現れる大墩保安語の語順による目的語主題化文を取り上げ、Shibatani (1985)が提案する典型的な受身文の特徴と比較しながら考察する。

著者の調査によると、中国語の「被」構文には、大墩保安語の(13b)(14b)のような語順による目的語主題化文が対応する。(13b) (14b)の大墩保安語の例では、語順による目的語主題化文が現れ、直接目的語が文頭に移動し、語順が無標の SOV 語順から変わっている。しかし依然として動作対象となる語が対格で現れていることから、主格で現れている動作主に

よる行為の影響を受けていると見ることができる。

(13) a. 那个 村庄 **被** 洪水 淹 了。
あの 村 被 洪水 水没する PRF

b. tə ndeva-nə mu si jengə-tɕ.
あの 村-ACC 悪い 水 水没する-PST
「あの村が洪水にやられた。」

(14) a. 小李 **被** 他 给 骗 了。
小李 被 3SG 给 騙す PRF

b. ɕioli-nə ndʑoŋ hoŋla-dʑo.
小李-ACC 3SG 騙す-PRF
「小李が彼に騙された。」

以上のように動作対象の後に動作主が現れる場合に加え、(15)(16)のように動作主が省略される場合もある。

(15) a. 饭 **被** 烧 糊 了。
飯 被 焼く 焦がす PRF

b. jamə-nə dzəurəgə-tɕ.
飯-ACC 焦がす-PST
「ご飯が焦がされた。」

(16) a. 到 了 早上，小 兔子 醒来 发现 西瓜 **被** 偷 了。
なる PST 朝 小さい うさぎ 起きる 見つける スイカ 被 盗む PRF

b. etələdʑi kur-sə, ga toli sər-dʑi,
朝 なる-COND 小さい うさぎ 起きる-CVB
ɕadʑir-də ndʑa-sə ɕigua-nə ɕalχə-tɕ.
土地-DAT 見る-COND スイカ-ACC 盗む-PST
「朝、小さいウサギが起きて土地をみたらスイカが盗まれていた。」

著者の調査では、中国語において「被」構文と同じく受身を表す「给・让・叫」構文も、大墩保安語では語順による目的語主題化文が対応している。前に述べた通り、劉月華・他(2019:753)は、「中国語の受身を表す「给」構文(17a)は目的語の位置に立つ動作主の省略が可能であるが、「让・叫」構文(18a)(19a)は動作主の省略が不可能である」と指摘している。一方、これらに対応する大墩保安語の語順による目的語主題化文は、すべて動作主の省略が可能である。以下の(17b)(18b)(19b)の文の動作主は省略することが可能である。

(17) a. 花瓶 **给** （他） 打 碎 了。
花瓶 给 (3SG) 打つ 割る PRF

b. huapiŋ-nə (ndʑoŋ) ekə-dʑi guraɕə-tɕ.
花瓶-ACC 3SG 打つ-CVB 壊す-PST
「花瓶が彼に壊された。」

(18) a. 他　的　猫　**让**　人　偷　了。
3SG　の　猫　让　人　盗む　PRF
b. ndʑoŋ-nə　mudzi-nə　(kuŋ)　ɢalχə-tɕ.
3SG-GEN　猫-ACC　(人)　盗む-PST
「彼の猫が人に盗まれた。」

(19) a. 那　本　书　**叫**　他　借　走　了。
その　冊　本　叫　3SG　借りる　いく　PRF
b. tə　ʂu-nə　(ndʑoŋ)　asgə-dʑi　dʑi-dʑo.
その　本-ACC　(3SG)　借りる-CVB　行く-PRF
「その本が彼に借りられた。」

以上から見られるように、中国語の受身文とされる「被」構文や「给・让・叫」構文に対応して、大墩保安語では語順による目的語主題化文が規則的に現れている。大墩保安語の語順による目的語主題化文を Shibatani (1985)の典型的な受身文の特徴からまとめると次のようになる。

① 大墩保安語には受身を表す形態素(動詞語幹に後続する受身形接尾辞)がない。
② 大墩保安語の語順による目的語主題化文において、直接目的語は対格のまま[7]文頭に移動し、主格に交替することがない。
③ 大墩保安語の語順による目的語主題化文の主語は動作の影響を受けていない。語順が変わっていても、依然として対格で現れた名詞句が主格で現れた名詞句による行為の影響を受けている。Shibatani (1985:841)によると、主語の位置は「最も高い焦点の位置」であり、動作の影響を受ける動作対象として受影性を示す。大墩保安語の語順による目的語主題化文において、主語は動作主であるため、主語が動作の影響を受けるとは言えない。
④ 大墩保安語の語順による目的語主題化文では動作主が省略可能であることから、動作主が少なくとも省略されている場合には脱焦点化しているといえる。

以上のことから、大墩保安語の語順による目的語主題化文では、Shibatani (1985)の提示する典型的受身文の特徴のうち、第四の特徴である語用論的機能のみが該当している。

中国語の「被」構文の機能的特徴は大墩保安語の語順による目的語主題化文と共通していることから、「被」構文に対応して大墩保安語の語順による目的語主題化文が規則的に現れると考えることが可能である。中国語の「让・叫」構文は、動作主が脱焦点化されないという点で大墩保安語の語順による目的語主題化文と共通していないが、動作対象の主題化[8]という点で大墩保安語の語順による目的語主題化文に対応して現れていると考えられる。

[7] 陳乃雄 (1986:98)は、保安語の同仁方言において、無標の語順 SOV であり、且つ対格接尾辞-nə が付かなくても文脈に誤解が生じない場合、直接目的語に後続する対格接尾辞-nə を省略することができる、と述べている。これに従えば、語順の変化が起こる場合、対格接尾辞-nə が省略できない。実際、著者の調査においても、動作対象が文頭に置かれる場合、対格接尾辞-nə が省略された例は現れなかった。
[8] Givón (1979:186)によれば、受身は非動作主の要素を文の主題の役割に昇格させるプロセスである。Givón (1979)に従えば、受身文における動作主が主題ではなくなり、動作対象は主題になり得ると考えられる。

4.4 まとめ

大墩保安語の語順による目的語主題化文、及びそれと対応して現れる中国語の「被・给・让・叫」構文の統語的特徴と機能的特徴は次のような表にまとめられる。

表 3：大墩保安語の語順による目的語主題化文と中国語の「被・给・让・叫」構文

		統語的特徴 (動作対象が主語)	機能的特徴 (動作主の脱焦点化)
大墩保安語	語順による目的語主題化文	×	○
中国語	「被・给」	○	○
中国語	「让・叫」	△	×

大墩保安語の語順による目的語主題化文は、Shibatani (1985)が主張する典型的な受身文の特徴と、統語的には異なるのに対して機能的には合致する。中国語の「被・给」構文は、Shibatani (1985)が主張する典型的な受身文の特徴と統語的にも機能的にも共通する。

中国語の「让・叫」構文は、動作対象が主語になる場合があるため、統語的特徴からは典型的な受身文に合致する[9]。しかし、動作主が省略できないため、機能的には Shibatani (1985)が主張する典型的な受身文の特徴に該当していない。中国語の「让・叫」構文に対応する大墩保安語の語順による目的語主題化文において、動作主が省略されていないのは、調査する際に中国語の「让・叫」構文の動作主を省略せずに示したためであると考えられる。

中国語の「让・叫」構文は、動作主が省略できないという点で大墩保安語の ʂi による目的語主題化文(5 節で述べる)と共通しているが、対応して現れないのが問題である。この点については、中国語の「让・叫」構文は使役文にも用いられるため、今後使役の観点も含めて考える必要がある。

5. 大墩保安語の ʂi による目的語主題化文と中国語の「是…(的)」構文

吕文華 (1985)は、中国語の「是…(的)」構文のうち、主語が動作対象である「是…(的)」構文は受身を表す、と述べている。

本節では、大墩保安語の ʂi による目的語主題化文と主語が動作対象である中国語の「是…(的)」構文を、Shibatani (1985)が提案する典型的な受身文の統語的特徴と機能的特徴から考察する。主語が動作対象である中国語の「是…(的)」構文は Shibatani (1985)が主張する典型的な受身文の特徴と統語的に共通しているが、機能的には共通していない。大墩保安語の ʂi による目的語主題化文は、Shibatani (1985)の典型的な受身文の特徴において統語の面で共通している。

4 節で述べた通り、中国語の「被・给・让・叫」構文に対応して現れるのは、大墩保安語の語順による目的語主題化文のみであるのに対して、主語が動作対象である中国語の「是…(的)」構文に対応して現れるのは、大墩保安語の語順による目的語主題化文と ʂi による目的語主題化文の両方である。

[9] 中国語の使役文として用いられる「让・叫」構文は、動作対象が主語になる場合があるが、主語になる要素が動作対象に限らないため、△とした。

5.1 大墩保安語の ʂi による目的語主題化文

本節では、大墩保安語の ʂi による目的語主題化文を、Shibatani (1985)の典型的な受身文の統語的特徴と機能的特徴から考察する。

5.1.1 統語的特徴

大墩保安語には、語順による目的語主題化文のほかに ʂi による目的語主題化文が存在する。ʂi による目的語主題化文は動作対象が主格で現れる(アルラ 2023:85)点で、Shibatani (1985)の典型的な受身文と統語的特徴が共通している。

(20) nə gatɕi **ʂi** tɕi godʑi kal-saŋ ni. (アルラ 2023:83)
この 話 TOP 2SG 自分 言う-PTCP.PST COP.NMLZ.EGO
「この話は君自身が話したものだ。」

5.1.2 機能的特徴

大墩保安語の ʂi による目的語主題化文は、(21)のように動作対象が有生である場合、動作主 tɕina が省略できない。

(21) ɕunə **ʂi** tɕina varə-saŋ no.
羊 TOP 狼 捕まえる-PTCP.PST COP.NMLZ
「羊は狼に捕まえられた。」

動作対象が無生である場合、ʂi の後には(22)のように動作主が現れるだけでなく、(23)のように動作が行われた時間、場所なども現れる。

(22) nə dʐ̩opiən **ʂi** ndʐoŋ dʐ̩aogə-saŋ ni.
これ 写真 TOP 3SG 撮る-PTCP.PST COP.NMLZ
「この写真は彼が撮った。」

(23) nə dʐ̩opiən **ʂi** ɕura or-gu tɕonə dʐ̩aogə-saŋ ni.
これ 写真 TOP 雨 降る-PTCP.NPST 時 撮る-PTCP.PST COP.NMLZ
「この写真は雨の日に撮った。」

大墩保安語の ʂi による目的語主題化文は、動作対象が有生である場合には動作主の省略ができないという点で、Shibatani (1985)の典型的な受身文の機能的特徴に合致していない。

5.2 中国語の「是…(的)」構文

本節では、中国語の主語が動作対象である「是…(的)」構文を、Shibatani (1985)の典型的な受身文の統語的特徴と機能的特徴から考察する。

5.2.1 統語的特徴

中国語の「是…(的)」構文は受身との関係からも議論されている。吕文華 (1985)は、中国語の「是…(的)」構文のうち、主語が動作対象である「是…(的)」構文は受身を表す、と述べている。主語が動作対象である「是…(的)」構文は、動作対象が主語になるという点で Shibatani (1985)の典型的な受身文と統語的特徴が共通している。

5.2.2 機能的特徴

吕文華 (1985)は、機能的観点から、「主語が動作対象である「是…(的)」構文の焦点は述語直前の要素である(吕文華 1985:24)。主語が動作対象である「是…(的)」構文の焦点位置に動作主、動作が行われた時間、場所などが現れ、省略は不可能である」(吕文華 1985:23)、と述べている。吕文華 (1985)に従えば、中国語の主語が動作対象である「是…(的)」構文は、Shibatani (1985)の典型的な受身文の動作主の脱焦点化に合致していない。

5.3 大墩保安語の ʂi による目的語主題化文と主語が動作対象である中国語の「是…(的)」構文の比較

本節では、Shibatani (1985)が提案する典型的な受身文の観点から、主語が動作対象である中国語の「是…(的)」構文とそれに対応して現れる大墩保安語の ʂi による目的語主題化文の特徴を考察する。

大墩保安語の ʂi による目的語主題化文は、著者が調査をした中では、主語が動作対象である中国語の「是…(的)」構文に対応して現れる場合があったが、完全に対応するわけではなく、語順による目的語主題化文(24c)が使われる場合も存在する。

(24) a. 羊　**是**　狼　抓　**的**。
羊　COP　狼　捕まえる NMLZ

b. ɢunə ʂi tɕina varə-saŋ no.(例文 21 再掲)

c. ɢunə-nə　tɕina　varə-saŋ　no.
羊-ACC　狼　捕まえる-PTCP.PST　COP.NMLZ
「羊は狼に捕まえられた。」

以上からわかるように、大墩保安語の ʂi による目的語主題化文と語順による目的語主題化文の両方とも、中国語の主語が動作対象である「是…(的)」構文に対応して現れる。大墩保安語の ʂi による目的語主題化文を Shibatani (1985)の典型的な受身文の特徴の観点からまとめると次のようになる。

① 大墩保安語の ʂi は受身を表す形態素ではない。ʂi は bu ʂi gudə pio-nə apə-saŋ ni.[10]「私は昨日チケットを買ったのだ。」(アルラ 2023:94)のような、動作主が文頭に置かれる能動文にも使われる。

② 大墩保安語の ʂi による目的語主題化文の動作対象は、主格に交替する。

③ 大墩保安語の ʂi による目的語主題化文の主語は動作の影響を受けている。上述の通り、大墩保安語の ʂi による目的語主題化文の動作対象は主格に交替していることから、文頭の動作対象が主語とみなされる。

④ 大墩保安語の ʂi による目的語主題化文は、動作対象が有生である場合、動作主の省略ができないことがある。

以上のことから、大墩保安語の ʂi による目的語主題化文は、Shibatani (1985) の提示する

[10] bu　ʂi　gudə　pio-nə　apə-saŋ　ni. (アルラ 2023:94)
1SG　TOP　昨日　チケット-ACC　買う-PTCP.PST　COP.NMLZ
「私は昨日チケットを買ったのだ。」

典型的受身文の特徴のうち、統語論的特徴と意味論的特徴を有している、といえる。

5.4 まとめ

大墩保安語の ŋi による目的語主題化文と、中国語の主語が動作対象である「是…(的)」構文の統語的特徴と機能的特徴は、次のような表にまとめられる。

表 4：大墩保安語と中国語の受身の統語的特徴と機能的特徴

		統語的特徴 (動作対象が主語)	機能的特徴 (動作主の脱焦点化)
大墩保安語	ŋi による目的語主題化文	○	×
中国語	「是…(的)」	○	×

大墩保安語の ŋi による目的語主題化文と、中国語の主語が動作対象である「是…(的)」構文は、Shibatani (1985)が主張する典型的な受身文の特徴と統語的に共通する。しかし、大墩保安語の ŋi による目的語主題化文も、中国語の主語が動作対象である「是…(的)」構文も、機能的には、Shibatani (1985)が主張する典型的な受身文の特徴と合致しない。

6. 議論

6.1 受身と主題化

受身も主題化も、文中の焦点を調整するプロセスである。両者とも特定の要素を「脱焦点化」[11]し、文の中で目立たせない機能を持つ。

3 節でも述べたように、典型的な受身文の主要な機能は動作主の脱焦点化(agent defocusing)である(Shibatani1985:830)。Shibatani (1985:832)は、「動作主への言及がないこと、目立たない統語的スロットで動作主に言及すること、複数形の使用による動作主の存在物の曖昧化、斜格を使用して動作主に間接的に言及すること等の現象は、動作主の脱焦点化と機能的に関連し、ある要素の脱焦点化の最も明示的な手段は統語的にエンコードしないことである」、と述べている。動作主の脱焦点化とは、能動文における主語である動作主が、受身文において統語的に降格あるいは省略される、ということである。脱焦点化された動作主は論理的には存在するが、統語論的には降格(省略)されたため、動作主への焦点が弱まり、他の要素に焦点が移る。

主題は、情報構造で扱う概念である。Lambrecht (1994:5)によれば、「情報構造とは、文文法の構成素であり、その中の事態の概念的表象としての命題が、語彙文法構造と組み合わされ、所与の談話文脈でこれらの構造を情報単位として使用及び解釈する発話参加者の心的状態と一致する」という。主題の特徴について Lambrecht (1994:127)は、「「所与の談話」で

[11] 本論では、動作主の「脱焦点化」をある存在物を文の叙述内容から外す操作と考える。この操作は統語論的には、ある要素が降格あるいは省略されるという形で実現する。
Nakagawa (2020)によれば、主題と焦点は相互に排他的であり、この論に基づけば、主題である要素は焦点から外れる。本節で用いる主題化における「脱焦点化」とは、語用論的にある要素が主題になることにより、焦点でなくなることを表す。

命題が、ある指示対象「について」であるとみなされる場合、その指示対象は命題の主題として解釈される：即ち、この指示対象に関する受け手の知識に「関連」し、それを増やす情報を表現するものである」、と述べている。談話において、話し手は聞き手の心的状態によって特定の表現形式を選択する。主題は、話し手と聞き手に共有されている要素である。談話はこの共有されている要素を中心に展開される。談話において主題は話し手と聞き手に共有されている旧情報であるから、語用論的に文の表層に表現されることなく、省略することが可能である。

Givón (1979:186)は、「受身は非動作主の要素を文の主題の役割に昇格させるプロセスであり、言語が主題を主語として識別し、主題と区別するコーディング特性を持っている限り、この昇格には主語化も含まれる可能性がある」、と定義している。Givón (1979)の観点に従えば、受身文において主題は動作主以外の要素であり、動作主は主題ではなくなると考えられる。Shibatani (1985)の典型的な受身文の主要な機能である動作主の脱焦点化[12]は、情報構造の観点からは動作主を主題から外す動作主の脱主題化であると考えられる。

大墩保安語の語順による目的語主題化文は、動作主の脱焦点化の機能を有する点でShibatani (1985:835)の受身と合致しているが、主語ではない要素を主語にするという点でGivón (1979:186)の受身に合致していない。一方で、大墩保安語の ʂi による目的語主題化文は、主語ではない要素を主語にするという点で Givón (1979:186)の受身と合致しているが、動作主の脱焦点化の機能を持っていないという点で Shibatani (1985:835)の受身に合致していない。

大墩保安語の語順による目的語主題化文と ʂi による目的語主題化文において、文頭に置かれる動作対象は両方とも主題である(アルラ 2023)。大墩保安語の語順による目的語主題化文において、動作対象を文の主題にするために、動作対象が文頭に置かれる。更に、動作主の省略が可能である。したがって、大墩保安語の語順による目的語主題化文は Shibatani (1985)の典型的な受身文の動作主の脱焦点化の機能を持っている。情報構造の観点から考えると、大墩保安語の語順による目的語主題化文は、動作対象が主題化される文であると考えられる。これに対して、大墩保安語の ʂi による目的語主題化文においては、動作対象が文頭に置かれ、動作主が述語の直前に移される。この場合動作主の省略が不可能であるため、Shibatani (1985)の典型的な受身文の動作主の脱焦点化の機能を持っていない。情報構造の観点から考えると、大墩保安語の ʂi による目的語主題化文は、動作主が焦点化される文であると考えられる。

大墩保安語のデフォルトの情報構造は、SOV 語順の通り動作主が主題であり、動作対象が焦点である。大墩保安語の語順による目的語主題化文と ʂi による目的語主題化文は、デフォルトの情報構造に反する情報構造を生み出す文であると考えられる。

6.2 中国語借用要素 ʂi の機能

中国語における「是」の意味機能は、判断(コピュラ)、焦点、モダリティ等の面から考察

[12] Shibatani (1985)の動作主の脱焦点化における「焦点」は、topic-focus の焦点とは異なる機能である。

されてきた。本節では、中国語における「是」のコピュラと焦点[13]の二つの機能から、大墩保安語の ʂi がそれらの機能を有するか否かを対照し、大墩保安語の ʂi が中国語の「是」から借用した可能性のある機能について検討する。

6.2.1 焦点

中国語は「是…的」構造で焦点を表す。焦点になる要素は「是」と「的」の間に置かれ、「是」の直後に現れる。中国語における焦点について石毓智 (2005)は、「文中の最も重要な新情報である。焦点化される要素は新情報だけでなく、最も主要な部分であり、一定の文法的手段によって表現される。現代中国語の焦点標識は「是」である。述語動詞の前に置かれる主語、目的語、状況語等の要素は、「是」によって焦点化することができる。焦点標識である「是」の動詞性が弱まる。「是…的」構造において、一般的には「是」を省略しても文が成り立つ(ただし焦点要素がなくなる)が、「的」は省略できない」(石毓智 2005)、と述べている。

アルラ (2023)は、大墩保安語の ʂi が用いられる文において、WH-疑問文の疑問詞と疑問詞の応答になる要素が ʂi の直後に置かれ、焦点化される、と述べている。大墩保安語の焦点になる要素も中国語と同様に ʂi の直後に置かれ、ʂi の省略が可能である。大墩保安語の焦点のある文における ʂi は、中国語の焦点標識の機能を借用したと考えられる。

6.2.2 コピュラ

中国語の「是」は、コピュラとしてコピュラ文に用いられる。中国語のコピュラの「是」について石毓智 (2005)は、「主語と目的語の間の同等、類別等の関係を表現する。主語と目的語は一般的に名詞類である。現代中国語の判断標識「是」は、文中の核心動詞として主語と目的語を連結するのに用いられ、省略できない」(石毓智 2005)、と述べている。

大墩保安語の ʂi は名詞述語文に用いられるが、調査資料の例文を見ると、大墩保安語の ʂi は(25)のように名詞述語文において必ずしも義務的に用いられるわけではない。

(25) maŋgə (ʂi) bonan kuŋ o.
1PL.INCL (TOP) 保安 人 COP
「私たちは保安人である。」

王森 (1991)によれば、中国語の臨夏方言における「是」は、北京語と同じくコピュラとしてコピュラ文に使われるという。

(26) 这个 书 是 我的 不是。(王森 1991:204)
この 本 COP 1SG.GEN COP.NEG
「この本は私のではない。」

大墩保安語の名詞述語文における ʂi はコピュラとして義務的に用いられるものではない。一方、大墩保安語の固有のコピュラである i/o は名詞述語文において義務的に用いられる。

[13] 焦点構造は、文中の焦点範囲に基づき、述語焦点（述語が焦点であり、主語は前提である）、項焦点（前提とされた公開命題の空項を識別するもの）、文焦点（主語と述語の両方に及ぶ事象報告または提示文）に分けられる(Lambrecht 1994:222)。本節で項焦点を中心に検討する。

以上より、大墩保安語の名詞述語文における ɕi は、中国語の「是」のコピュラの機能を借用したものではないと考えられる。

中国語の臨夏方言における「是」はコピュラとして使われることから、大墩保安語の名詞述語文における ɕi が、中国語の「是」のコピュラの機能を借用していないのは、現地の中国語方言の影響ではないと考えられる。

以上、中国語における「是」が持つ焦点標識とコピュラの二つの機能に注目して大墩保安語における ɕi と対照することで、大墩保安語における ɕi がコピュラまたは焦点標識の機能を持つか否かについて考察した。大墩保安語の ɕi は、中国語の「是」の焦点標識の機能を借用したが、コピュラの機能は借用していない。

7. 結論

本稿では、中国語の「被・给・让・叫」構文及び主語が動作対象である「是…(的)」構文に対応して現れる大墩保安語の二つの目的語主題化文を Shibatani (1985)が提案する典型的な受身文の特徴の観点から考察を行った。

著者の調査では、中国語の「被・给・让・叫」構文に対応して語順による目的語主題化文が用いられ、主語が動作対象である「是…(的)」構文に対応して ɕi による目的語主題化文と語順による目的語主題化文の両方が使われる。表 5 が示すように、大墩保安語の語順による目的語主題化文は動作対象が主語にならないなど、Shibatani (1985)が主張する典型的な受身文の特徴の一部を欠いている。これに対し、ɕi による目的語主題化文は動作対象が主語となる(主格で現れる)点で典型的な受身文と共通する特徴があるにもかかわらず、中国語における受身文に対応して現れるわけではない。

表 5：大墩保安語の目的語主題化文と中国語の受身文の特徴

		統語的特徴 (動作対象が主語)	機能的特徴 (動作主の脱焦点化)
大墩保安語	語順による目的語主題化文	×	○
中国語	「被・给」	○	○
大墩保安語	ɕi による目的語主題化文	○	×
中国語	「是…(的)」	○	×

表 6 が示すように、大墩保安語の語順による目的語主題化文において動作主が省略可能であるのに対し、ɕi による目的語主題化文では動作主が省略できない。この二つの目的語主題化文のうち、語順による目的語主題化文は中国語の「被」構文と共通して、動作主の脱焦点化を行っているという点で、Shibatani (1985)が提案する典型的な受身文に機能の面で合致している。そして、この機能の面での共通性から、受身の形態素の存在しない大墩保安語において語順による目的語主題化文が中国語の「被」構文に対応して用いられていると結論付ける。

表 6：大墩保安語の語順による目的語主題化文と ʂi による目的語主題化文の特徴

		統語的特徴 (動作対象が主語)	機能的特徴 (動作主の脱焦点化)
大墩保安語	語順の目的語主題化文	×	○
大墩保安語	ʂi の目的語主題化文	○	×

今後の課題として、大墩保安語の情報構造を体系的に明らかにすることがあげられる。

謝辞

本稿は、日本北方言語学会第 7 回大会(2024 年 9 月 22 日)で発表させていただいた内容を基に修正を加えたものである。論文を指導してくださった指導教員の児倉徳和先生に深く感謝しております。貴重なご指摘とコメントをくださった角道正佳先生、呉人徳司先生、発表時にご指摘とコメントをくださった先生方、二名の査読者の方、それぞれ感謝を申し上げます。本研究の言語調査に協力してくださった馬瑞先生に感謝を申し上げます。

略号一覧

1:一人称　3:三人称　ACC:対格(Accusative)　CAUS:使役(Causative)　COND:条件(Conditional)　COP:コピュラ(Copula)　CVB:副動詞(Converb)　DAT:与位格(Dative)　EP:挿入音(Epenthetic Vowel)　GEN:属格(Genitive)　INCL:包括形(Inclusive)　NEG:否定(Negative)　NMLZ:名詞化(Nominalizer)　PASS:受身(Passive)　PRF:完了(Perfect)　PST:過去(Past)　PTCP:形動詞(Participle)　SG:単数(Singular)　TOP:主題(Topic)

参考文献

アルラ (2023)「情報構造から見た大墩保安語の ʂi」『北方言語研究』13. pp.77-99.

陳乃雄 (1986)『保安语和蒙古语』呼和浩特：内蒙古人民出版社.

Givón, Talmy. (1979) *On understanding grammar*. New York: Academic Press.

Hashimoto, Mantaro J (1988) The structure and typology of the Chinese passive construction. In: Shibatani, Masayoshi. (ed.) *Passive and voice.* pp.239-254. John Benjamins Pub Co.

Kullmann, Rita. and D. Tserenpil (1996) *Mongolian grammar*. Hong Kong: Jensco, Ltd.

Kurebito, Tokusu. (2017) Diversity of the passive voice in the Mongolic languages. In: Ebata, Fuyuki. and Kurebito, Tokusu. (eds.) *Linguistic typology of the north*. 4. pp.1-11. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA), Tokyo University of Foreign Studies.

Lambrecht, Knud. (1994) *Information structure and sentence form: Topics, focus, and the mental representations of discourse referents*. Cambridge: Cambridge University Press.

劉月華・潘文娱・故韡 (2019)『実用現代汉语语法』北京：商务印书馆.

吕文華 (1985)「主语是受事的“是…的”句」『汉语学习』2. pp.23-26.

三宅登之 (2009)「行為連鎖の観点から見た中国語の“被”構文」東京外国語大学『語学研究所論集』14. pp.33-64.

Nakagawa, Natsuko. (2020) *Information structure in spoken Japanese: Particles, word order, and intonation.* Berlin: Language Science Press.

Shibatani, Masayoshi. (1985) Passive and related constructions: A prototype analysis. *Language.* 61(4). pp.821-848.

——————— (1990) *The languages of Japan*. Cambridge: Cambridge University Press.

石毓智 (2005)「論判断、焦点、強調与対比之関係―“是”的語法機能和使用条件」『語言研究』4. pp.43-53.

Тодаева, Б. Х. (1964) *Баоаньский язык.* Москва: Наука.

王森 (1991)「臨夏方言“是”字的用法」『方言』3. pp.204-205.

Wu Hugjiltu (2003) Bonan. In: Janhunen, Juha (ed.) *The Mongolic languages*. pp.325-245. London and New York: Routledge.

照那斯图 (1982)『土族语简志』北京：民族出版社.

朱德熙 (1982)『语法讲义』北京：商务印书馆.

A Study of Topicalization in Bonan from the Perspective of Passive

Arula
(Tokyo University of Foreign Studies)

Keywords: Bonan (Mongolic), descriptive linguistics, passive, topicalization

The objective of this study is to examine the characteristics of object topicalization constructions based on word order and object topicalization constructions based on the Chinese borrowing element *ʂi*(是) in the Dadun dialect of Bonan, a Mongolic language spoken in Gansu Province, China, from the perspective of passive voice. In conclusion, it is argued that object topicalization constructions based on word order in Dadun Bonan share functional similarities with the typical passive constructions proposed by Shibatani (1985), while object topicalization constructions based on *ʂi* share syntactic similarities. This study shows that object topicalization constructions based on word order share functional similarities with the typical passive constructions proposed by Shibatani (1985) in that agent defocusing is occurring. Depending on this commonality in function, we conclude that object topicalization constructions based on word order are used in Dadun Bonan, which does not have passive morphemes, in correspondence with the passive voice in Chinese.

（アルラ　ruramongol@gmail.com）